



大学におけるアクティブ・ラーニングの模索 ～デジタル絵本の作成と実演～

教育学部 今田 晃一



大阪府教育委員会の指導主事を経て、2003年に文教大学に着任。専門は教育方法、教育学、情報教育で、現在は越谷市の先生方と連携し、「越谷ICT授業づくり研究会」に取り組んでいる(月1回文教大学で実施)。知識が社会のあらゆる領域で重要な価値をもつ「知識基盤社会」で求められる資質、能力に留意し、デジタル・ネイティブ世代である大学生の特性を生かした教育方法、保育・教育におけるデジタルの可能性について検討している。
(いまだ こういち)

主体的・協働的に学ぶアクティブ・ラーニングの試みとしての「マルチメディア教材論」について紹介させていただく。デジタル・ネイティブ世代の学生が、幼児教育におけるデジタルの可能性を追究し、その成果を幼稚園の先生方とともにPDCAサイクルで継続的に改善する。学習者(学生・先生)が学ぶ必然性、取り組む意義を実感できる状況の設定に留意した授業・研修の新しいあり方について模索している。

1. 大学におけるアクティブ・ラーニングの模索

文部科学省は、2014年11月20日に中央教育審議会に対し、「初等中等教育における教育課程の在り方」について諮問をし、次期学習指導要領改訂に向けての議論がスタートした。この諮問の大きなキーワードの一つが、資質・能力と教育内容と教育方法を一体にとらえた、「アクティブ・ラーニング(課題の発見と解決に向けた主体的・協働的な学び)」である。アクティブ・ラーニングについては、現在はまだ議論中でありその定義などを確定的に語られることはない。

しかし、下村博文文部科学大臣がアクティブ・ラーニングに言及する時、それは小・中学校ではなく大学入試改革も含め、高校・大学教育を一気に変えようという意図が感じられる。確かに小中学校では、「総合的な学習の時間」を中心に、多様な教科等において主体的・協

働的な学び、学校による温度差はあるとはいえ、アクティブな学習が進められている。

それに対し、高校・大学教育においてはまだまだ先生が一方向的に話し、それを生徒・学生が一方向的に聴く講義型の授業が多く、それをアクティブな学びに変えていく必要があるというメッセージであろう。

そこで保育士や教員(幼稚園・小学校)を目指す心理教育課程の学生を対象とした「マルチメディア教材論」では、将来のアクティブ・ラーニングの担い手として、学生自身がその意義を理解しながら主体的、協働的に取り組む授業のあり方を検討してきた。

2. デジタル・ネイティブ世代の特性を生かし、幼稚園の先生方とともに改善を重ねる

今の大学生は、生まれた時からインターネットや携帯電話など、デジタルメディアに囲まれて育ったデジタル・ネイティブと呼ばれる

世代であり、言葉より映像重視、感性重視がその特性のひとつとだといわれている。特に映像の目利き世代とも言われている。そんな大学生の特性をぜひ生かした授業をつくりたい。

そこで本授業は、2010年のタブレット型情報端末であるiPadの発売を機に、地元の幼稚園の先生方とともに「幼児教育におけるデジタルの可能性」を検討している。学生にとっては幼稚園の現場で、実際に自分が作成した教材に対する園児の反応を見られること、幼稚園側では今後、幼児教育にデジタル（機器やコンテンツ）を導入する際の参考にするというWin-Winの関係で進めている。



北越谷幼稚園における実演後の集合写真

学生は2～3人で1グループをつくり、それぞれのグループが3～4人の園児を約30分間にわたってiPadの様々な機能（デジタル絵本、デジタル教材の作成、アプリの活用、動画編集等）を駆使した活動を行いながら園児に対応する。そして幼稚園の先生方は、それぞれがグループに分かれてその様子を観望し、活動が終わったら学生の園児への対応やiPadの活用、作成したデジタル教材、指導略案等に対して評価、指導を行う。学生にとっては現場の先生方にアドバイスをいただける貴重な場であるとともに、幼稚園側にとっては「ICT活用の園内研修会」の場でもあることがこの実践の大きな特徴である。

学生が考え実演した幼児教育におけるデジタルの可能性についての機器を中心とした活用方法の提案を受けて、後日園内で先生方で協議を行うとともに、筆者の講義等を交えながら理論と実践をつなぐことをめざして研修を重ねる。その成果は知見として、翌年度の授業で幼稚園の先生から改善点として改めて指導をいただくという、PDCA（Plan：計画→

Do：実行→Check：評価→Act：改善）のサイクルで、幼稚園・大学の双方で改善を重ねていく。

結果、現時点では幼児教育におけるデジタル、特にiPadは、主活動と主活動の間などの細切れの時間に活用することが有効であること。内容的にもオリジナルのデジタル絵本の作成と実演より、紙の絵本の読み聞かせのための導入デジタル教材のようなサブ的な使い方が、目の健康の配慮からも有効ではないか、という意見に現在は到った。実演後の園内研修会の協議では、当初はiPadの有用性やその楽しさで盛り上がったが、iPadをサブ的に使うという幼稚園教諭の冷静な一言が議論を新しい方法へと導いたのである。このように想定した結論がよい意味で裏切られることも、連携の醍醐味である。



学生が作成したiPad対応のオリジナルデジタル絵本（一部）

3. アクティブ・ラーニングに必要な状況の設定

主体的・協働的に学ぶアクティブ・ラーニングでは、課題の発見と設定は何より重要であり、学習者自身がその課題に取り組む意義を認め、その必然性を実感できなければ、学びへのモチベーションは続かず、充実したものにならない。そのための状況の設定が、教員の大きな仕事となる。iPadを多様な他者とつながるきっかけのツールとして、今後も新しい学びのデザインを、楽しみながら追究したい。

なお2015年度の実践は、7月3日（金）に約70名の学生とともに私立大袋幼稚園で実演（先生方にとっては研修の一部）の予定である。